

二日目の朝が来た。普陀山に行くにはバスに乗り高速道路経由で行く方法、高速艇で行く方法、また舟山市には飛行場もあり多くの選択肢があるが、我々は上海市内にある人民広場前から出発するバスで行くことにした。ホテルは上海南浦瑞峰酒店で普陀山滞在を挟み、前後2泊することになっている。大きな荷物はフロントに預けて朝6時にチェックアウトした。

ここで普陀山の紹介をしたい。「普陀山」は、「山」とあるが実は「島」の名前である。浙江省・舟山群島に属しており、広さは12.5km²しかない杭州湾の湾口にある小島だ。一番高い山は290m余りの仏頂山で、吹けば飛ぶような島である。しかし中国の四大仏教名山のひとつであり、百を超える寺院と千人以上の僧侶が生活している。

この島に年間360万人を超える観光客が訪れると言うから驚きだ。ちょっと信じがたく、となればあの小島に一日1万人平均が訪れる計算になる。白髪三千丈の類に思われる。残る四大仏教名山は、五台山(最高峰/葉頭峰3058m・山西省)、九華山(最高峰/十王峰1342m・安徽省)、峨眉山(最高峰/万仏頂3098m・四川省)である。普陀山は、島全体が「海天仏国」と別称される観音霊場であり、観音菩薩を祀っている。他の名山も、五台山は文殊菩薩、九華山は地藏菩薩、峨眉山は普賢菩薩をそれぞれ祀っている。

普陀山が観音霊場となったのは面白い謂れがある。916年のことで日本は平安時代、中国は907年に唐が滅び五代十国時代である。中国への渡来僧の慧鑿大師が留学を終え日本に帰国しようとした時だ。五台山で観音像を求め寧波の港から出航し舟山列島にさしかかった時、海面から蓮の花が現れて船の行く手を遮ったため、普陀山にある潮音洞に停泊した。大師は観音様が中国に残りたがっているのだと考え、観音像をこの島に残していったという。それを見た普陀山の住民が観音像を祀ったらしい。島



左図は上海と普陀山の位置関係です。右図、普陀山全図

の南東にある潮音洞のそばに「不肯去観音院」という立派な寺院がある。「不肯去」は、「(日本に) 行くのを拒む」という意味で、観音様の気持ちを^{そんたく}忖度する名称がつけられているが、それにしても面白い名前をつけたものだ。

さて、朝7時に人民広場前から出発した高速バスは、上海博物館の前を通り高速道路に入った。1時間半位たったであろうか、「南湖」というサービスエリアに着いた。15分のトイレ休憩である。トイレに行く途中に売店があり、いろいろ売っているが薄暗くてかつ商品が雑然と置かれていてあまり見る気も食べる気も起きない。トイレは広いが管理が行き届いておらず個室のドアや水道の蛇口は3分の1は壊れていた。あとはご想像にお任せするとしよう。またバスは走り出したが、そのうちに友人が「誰かが杭州湾にかかる長い橋がもうすぐ見えると言っている」と教えてくれた。するとまもなく「杭州湾跨海大橋」が見えてきた。気が付くとバスはもう海の中の真っ直ぐな道を走っていた。

この杭州湾の中ほどに架けられた長大橋は2008年5月1日に開通した。北京オリンピックが開催された年である。全長約36kmでとにかく長い。36kmと言えば東京駅を出発して東海道線で横浜駅を過ぎて戸塚駅近くまでの距離である。ほぼ直線で嘉興と寧波を6車線で結んでいる。この橋ができ



潜水艦を思わせるフェリー

るまでは上海から寧波まで陸上で行くには、杭州湾に沿ってまずひたすら西に向かって杭州まで行き、そこで東に向きを変えてひたすら走行するしかなかった。時間短縮による経済効果は計り知れないであろう。杭州湾は水深が浅いのでこれだけの橋の建設が可能となったのである。

バスは橋を渡り終え、またしばらく高速道路を走り続ける。そしてようやく「舟山」と書いてある出口で一般道に出た。最終的に普陀山行のフェリー乗り場の近くまで行くのであるが、さらに一般道を延々と走る。そして大きな吊り橋や長い橋を3つくらい渡り11時30分ようやく終点に着いた。4時間半かかったわけである。それでもこれらの橋が架かっているときはかなりの時間を要したらしい。

駐車場からすこし歩いて天守閣のように高く聳えている建物に向かう。建物に入ると商店や食堂がありその奥がフェリー乗り場らしい。お昼になったので皆でバイキング形式の昼食を摂る。25元と安かったがお世辞にも美味しいとは言えない。“一分銭一分貨”といったところか！ 食事中に知らない男性から直径数センチのプラスチック板にKと書かれたワッペンが配られた。友人に聞くとあのバスにはガイドが付くことになっていてバスの人はその人が率いるツアーの一員となると説明を受けた。道理でチケットが少し高いと思ったが、むしろガイドが付く方が安心である。〇〇時に〇〇に集合すること、と言っているようであるが会話の速さについていけない。初めていくところは友人と行くに限る。

12時半ころ船着き場に行くと先ほどの男性が皆

を誘導する旗を掲げている。ここからあの旗の下に団体行動となった。ゲートを入ると岸壁に何とも異形な舟が停泊している。とても観光地のフェリーとは思えない。まるで潜水艦が海面に浮上したような形をしている。デッキに上がって外の風景を見る造りになっておらず、じっと座って窓から外を見るしかない。その窓はと言えば汚れていて見づらい。黙っていても毎日1万人来るわけであるからお客を呼び込む努力はいらぬ。したがってガラス拭きなんかしないのであろう。仏教の聖地に向かう舟であるからもうすこし綺麗にすればいいものを。そんなことを思っていたら出航して10分もたたないうちに対岸に着いた。そのうち吊り橋か海底トンネルで本土とつながるかもしれない。

上陸しガイドについて行ったところにマイクロバスが停まっていた。黄色のバスで車体には「普陀山旅游巴士」と書いてある。これがこの島の交通機関である。電車は勿論ないがタクシーもない。この島で過ごした2泊3日、よく利用したが乗るたびに5元払った。20数名全員が乗り込むと島の西北端にある「観音洞」に向かった。

この地域は「西天風景区」と呼ばれ、洞窟や奇岩の多い所だ。観音洞は大きな岩の洞窟であり、名前は失念したがあるお寺の境内の一番奥にあった。その洞窟に行く前に皆お線香の売り場に行って、長さが30～40センチもあるお線香の束を買い求めている。友人たちはまずお寺の前に立ち、束の中から3本くらい取り出し、大きな香炉の形をした火鉢の中にある火種で火を付ける。それを額の前に掲げ東西南北にそれぞれ3回ずつ頭を下げている。それが終わると寺院の中で高さ10センチ程度の台の上に膝を付け頭を下げたまた三回位お祈りしている。そこが終わると洞窟の前でまた同じことをしている。お線香が沢山必要なのである。

友人が「お線香を買わないの？」と聞くので、「私も仏教徒だが、日本にはこのような習慣はない。手を合わせて祈っているよ」と言うと、あきれたような顔をしていた。仏教もところ変われば祈り方もいろいろだ。こんなに大袈裟に祈りを捧げているのであ

るからさぞかしご利益も大きいであろう。

次に向かった所は奇岩のあるところだ。最初の奇岩は、「二亀聴法石」だ。大きな岩の側面に亀がへばりついているように見える。以前、張家界に行ったとき林立している岩にいろいろな名前が付いていたのを思い出す。日本は岩山が少ないので何かになぞらえた名前のある岩はあると思うが私は知らない。驚いたのは少し歩いた



観音洞と観音洞横の寺院に長い線香を手向ける観光客

ところにある「磐陀石」である。掲載した写真を見ていただきたい。巨大な岩の上に大型バスくらいはある岩が乗っかっている。手で押してもごろんと転がり落ちそうなバランスである。地震の多いわが国ではまず見られない光景である。その石の側面に大きな文字で「磐陀石」と彫っており、文字を赤く塗っている。その文字のとなりに「侯継高書」とタテに小さく彫っており黒く塗られている。磐陀石の磐は、大きな石という意味であり、陀は普陀山の陀を取ったのかと思ったがネーミングの由来は知らない。

私は、侯継高という人が少し気になった。それはこの島の何か所かでこの名前を見たからだ。日本に帰ってヤフーで検索したが、名前は出てきたものの「日本風土記」と書かれてあるだけで何のことかわからない。何人かの中国人の友人に聞いてみたが皆知らな



今にも転がり落ちそうな磐陀石。「磐陀石」の文字は侯継高の書である

いと言う。そこで前号で書いた上海の友人と町田市在住の友人Sさんに調べてもらった。

その結果次のことがわかった。侯継高は明(1368年～1644年)の時代の人で1533年に江蘇省の肝胎というところで生まれ1602年70歳で没している。武人で各地の軍隊の指揮官を歴任している。この時代、倭寇が中国の沿岸を荒らしまわっていたが、本土防衛のため倭寇と幾度となく戦

い戦果を挙げたようである。倭寇については前期倭寇と後期倭寇でその実態が異なるなどいろいろな見方があるがここでは問わない。武人として傑出していたらしいが彼の名が歴史に残ったのはいくつかの著作であり書である。武人にして文人であったのだ。著作については、〈游補陀洛迦山記〉、〈補陀山志〉、〈全浙兵制考〉、そして〈日本風土記〉がある。

日本風土記には、当時の日本の地理、政治、経済、文学、風俗、人情などが詳しく書かれているそうである。早稲田大学にはこの書が保管されているという。また書家でもあり、その筆致は雄渾の一言である。普陀山には何か所か彼の文字が石に刻まれているが、そのひとつが前述の「磐陀石」と書かれたものである。

また「海天仏国」という文字が刻まれている石がある。この文字により普陀山は、別名を海天仏国との美しい名前をもらっている。前述の中国の四大仏教名山の中で海上にあるのはここ普陀山だけなので、この名を付けたようだ。なぜこのような優れた人物があまり知られていないのであろうかと思った。相手が倭寇ではなく国との戦いであれば有名になったかもしれない。しかし名が埋もれそうになりそうな人物でもその功績にはもっと光を当てて小さくとも銅像のひとつでも建立したら如何なものか。

次は島内一番の大きさを誇る「普濟寺」に向かったが次回に譲ることにする。

(続く)